

鹿児島県内方言調査から見えてくること

ーフィールドワーク教育としての方言調査の意義ー

松尾弘徳

はじめに

フィールドワークを大学教育の中に積極的に導入しようとする動きが近年著しい。鹿児島国際大学においてもゼミナールの活動などでフィールドワークを推進しようという潮流にあり、2012年度にはフィールドアクションプログラム (Field Action Program。以下、FAP) 事業の公募が学内にておこなわれた。その事業に稿者の日本語学ゼミも採択され、大学の支援を受けて2012年9月に鹿児島県内の離島の一つである屋久島にて方言調査をおこなった。

本稿では、この屋久島調査の企画立案から終了までの流れを振り返ることで、フィールドワーク教育という観点から見たときに方言調査が持つ教育的効果というものについて述べてみたい。

1. 鹿児島国際大学フィールドアクションプログラム (FAP) の採択

1.1. FAP とは

FAP は、鹿児島国際大学就業力プロジェクト室が2012年度に実施した学生・教職員への活動支援事業である¹。これに採択された場合、活動経費の補助を受けることができるため、稿者の開講する日本語学ゼミナールでも応募をし、選考の結果採択を受けることができた。なお、FAP では成果報告会への参加や、活動成果報告書及び活動日誌の提出が義務づけられていた。

日本語学ゼミで採択されたテーマは「後世に遺したい方言たち～鹿児島本土および離島にみる方言の世代差」。まず、FAP 成果報告書 (就業力プロジェクト室宛2013年1月31日提出) に記載した概要を以下に転載する。

キーワード：方言調査、フィールドワーク、FAP、鹿児島方言、屋久島

¹ FAP の実施要領は Web 上でも公開されている (2014年1月時点) ので詳細は下記 URL 参照のこと。
<http://www.iuk.ac.jp/k-syugyo/info24.html>

現在、鹿児島では方言の共通語化が急速に進み、伝統的な方言は衰退が進んでいる。とくに、若い世代には自分たちが方言を話しているという意識は非常に低い。本活動では、離島（今回の調査では屋久島を方言調査の対象地域とする）も含めた鹿児島県内数地点の方言を調査し、その結果をもとに鹿児島方言の現状を明らかにすることを目的とする。調査の内容はアクセントや文法項目に関する対面調査である。研究では、特に方言の世代差を明らかにすることを目指す。

(以上、原文ママ)

上記の活動概要に沿った活動計画を立て、2012年9月1日～3日の3日間にわたり鹿児島県熊毛郡屋久島町にて方言聞き取り調査をおこなった。

本プロジェクトに参加したのは、2012年度日本語学ゼミ所属の国際文化学部2, 3, 4年生あわせて13名²。氏名は下の通り。

大久保圭, 下園由香, 荒井智絵, 岩元詩織, 上之段諒, 倉元啓多, 片野田聡美,
阿久根悠, 馬場佑貴, 神窪美里, 中川勇太郎, 新穂進太郎, 馬場園奈那 (敬称略)

これに加えて、稿者と親交のある九州大学大学院人文科学府所属の大学院生2名(門屋飛央, 村山実和子の両氏)を調査補助役として招き、聞き取り調査のアシストを担っていただいた。

また、方言調査で聞き取りをおこなったのは、1. 同意要求表現, 2. あいづち表現, 3. 疑問文, 4. 否定表現, 5. 語彙の全5項目。各項目の内容と調査結果については、1, 2. にて具体的に述べる。

上記5項目について、屋久島方言インフォーマント(被験者)19名³に対して口頭での聞き取り調査をおこない、その結果をExcelデータ化したうえで方言学的分析を加えた。

以上が、今回のフィールドワークの活動内容である。

1.2. 方言調査項目と分析結果概観

以下、各調査項目の聞き取り内容の説明と、その分析結果を少々具体的に記す⁴。

まず、「1. 同意要求表現」というのは、会話の相手に同意を求める表現のことである。例

² うち2名は、屋久島での現地調査には学内インターンシップ、および海外留学のため同行せず。

³ インフォーマントを世代ごとに分けると次のようになる。今回は世代による方言差の分析に重点を置いたため、若年層から老年層まで万遍なくインフォーマントを確保できるよう努めた。

10代：3名, 20代：2名, 30代：1名, 40代：2名

50代：4名, 60代：2名, 70代：3名, 80代：2名

⁴ 以下の記述は、プロジェクト参加学生作成のFAP成果報告書記載内容を私にまとめなおしたものである。

えば、朝、友人と散歩していて、まだまだ夏だと思っていたが思ったよりも肌寒かったとする。そのとき、友人も自分と同じように思っているだろうということを確認するために、「今日、ちょっと寒くない？」あるいは「寒いよね？」と聞くときの下線部分の表現が同意要求表現である。今回は、動詞、形容詞、形容動詞、名詞といった述語部分の品詞によって表現が違うか、また同意要求表現をいくつかの意味に細分類したときの意味の違いによって表現が違うかを明らかにする目的で調査をおこなった。調査の結果、屋久島方言では「チゴローネー」、「サムカネー」、「カントヤロネー」、「サイゴウサンヤロネ」、「イトーナカカ」、「イテローガヨ」などのバリエーションが使われていることが分かった。

次に、「2. あいづち」は、会話の相手の発言に対して「うん」とか「そうだよね」といった肯定的な反応をする際の表現である。例えば、他の県から遊びに来た友人が「やっぱり鹿児島は芋焼酎が有名だしおいしいね」と言ったとする。それに対して、その通りだと思ったときにどのようなあいづち表現を使用するかを調べた。ここでの狙いは話し手と会話の相手との間での「情報量の差」や「共有体験の有無」によって、あいづち表現がどのように使い分けられているかを明らかにすることである。情報量の差というのは、先ほどの例だと、友人に「やっぱり鹿児島は芋焼酎が有名だしおいしいね」と言われてあいづちを打つとき、鹿児島に住んでいて芋焼酎の有名さやおいしさをよく知っている場合であれば、会話の相手（ここでは友人）よりも話し手のほうが情報量が多いということになる。いっぽう、共有体験というのは、例えば、友人から「今日はなんだか蒸し暑くて、だるい」と言われ自分もそう思っていたという場合であれば、会話の相手（友人）と話し手との間に共有体験があるということになる。調査の結果、屋久島ではあいづち表現に次のような世代差が見られることが分かった。

20代：「ダヨー」、「ダヨネー」、「ダカラヨ」

30代：「ダカラヨー」、「ヨー」、「ヨーヨー」

40代以上：「ジャッド」、「ジャード」、「ジャログ」、「ヨーヨー」

「3. 疑問文」では、会話の相手に質問をしたり質問風に独り言を言ったりするときの文である疑問文にどのような助詞が使われているのかを調べた。例えば、昨日の晩ごはんを聞かれていくら考えても思い出せないとする。その場合に「昨日、何を食べたっけ？」というときの下線部分を聞くことで疑問助詞の形式が分かる。ここでは、疑問文にどのような助詞が使われているのか、また述語の違いや疑問文の種類によって使われる助詞が変わるかどうかを明らかにすることを目的に調査をおこなった。調査の結果、屋久島では南部の安房地域よりも北部の宮之浦地域や楠川地域のほうが、疑問助詞のバリエーションが多いことが分かった。先ほどの例で述べると、南部の安房では、幅広い年齢層が「タベタヶ」を使っていた。しかし、北部の宮之浦や楠川では、「クウタカー」、「クウタナー」、「クウナー」などの様々な方言形が使われていた。

「4. 否定表現」は、例えば「今日はどこにも行かない」といった否定や打ち消しの表現の

ことである。この表現は、東日本と西日本で異なっていることが知られている。例えば、東日本では「行かない」と言うところを西日本では「行かん」と言う。ここでは、屋久島でどのような否定表現が使われているのかを調べた。調査の結果、「イカンロー」、「イカンカッタロー」、「イカンジ」、「ネーロー」、「ナカロー」などの方言が使われていることが分かった。

「5. 語彙」は、まず「おんな(女)」などの語頭に「お」がくる語、「におい(匂い)」などの語中語尾に「お」がくる語、「ごま(胡麻)」などの語頭に「ご」がくる語、「あご(顎)」などの語中語尾に「ご」がくる語を調べた。方言によっては、語頭の「お」・「ご」と語中語尾の「お」・「ご」の発音が異なっており、屋久島においてこのような発音の違いがあるのかどうかを調べることを目的とした。また、共通語では「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」はそれぞれ同じ発音であるが、方言によっては「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」の発音を区別する方言がある。これら「じ」、「ぢ」、「ず」、「づ」の四つの音は「四つ仮名」と呼ばれている。例としては、「じ」の発音で「かじ(火事)」、「ぢ」の発音で「かぢ(舵)」、「ず」の発音で「かず(数)」、「づ」の発音で「みづ(水)」などがある。ここでは、四つ仮名による発音の違いが屋久島方言に残っているのかを調べるのが狙いである。今回の調査では、屋久島でどのように発音されているかを探るための音声データを得ることができた。

このようにFAPの屋久島調査を通して文法項目、音声項目など多くの方言データを得ることができたのであるが、これらのデータは、それ以前に日本語学ゼミナールでおこなってきた鹿児島県内数地点での方言調査⁵で得られたデータと照合することで、屋久島と鹿児島県本土の方言比較もおこなうことが可能である。

ただし、本稿はフィールドワーク教育の意義を考えることが主目的であるため、これ以上の方言学的観点、および日本語学的観点からの詳細な分析は控える。これらの考察については稿を改めたい。

2. 「方言調査」というフィールドワーク

ここでは、方言調査に関わる作業の開始から終了までの概要を記すことで、方言調査がどのような点においてフィールドワークたり得るのかということについて述べてみたい。

⁵ 稿者のゼミナールでおこなってきた方言調査は次の5回に及ぶ。(2014年1月時点)

2010年9月、調査地点：鹿児島市、伊佐市、指宿市

2011年3月、調査地点：鹿屋市、垂水市

2011年9月、調査地点：鹿児島市、枕崎市、薩摩川内市、霧島市

2012年3月、調査地点：鹿児島市

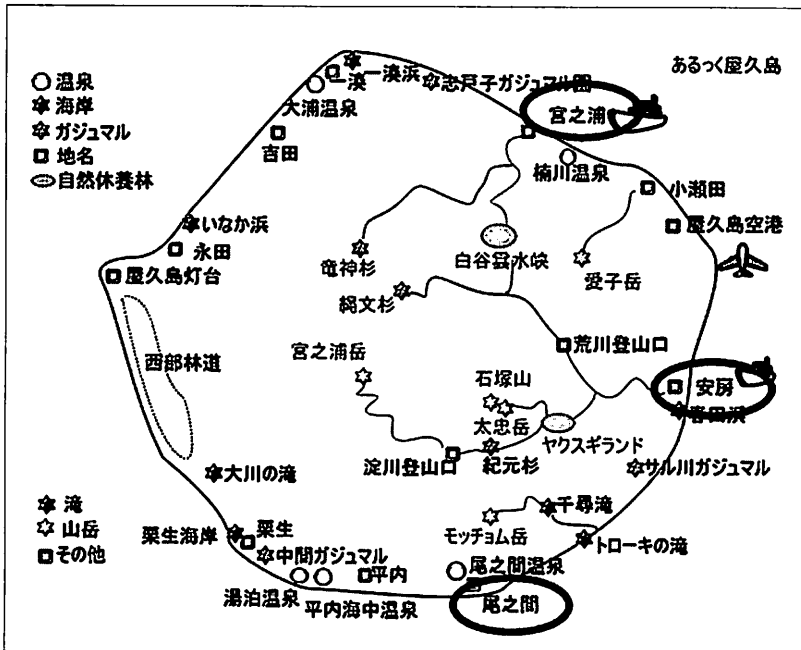
2012年9月、調査地点：熊本郡屋久島町

2.1. 調査実施前の下準備

方言調査を実施するにあたっては、当然のことだが入念な下準備が必要となる。調査に先立っておこなわなければならないのは、次のような事柄である。

- 調査項目の選定
- 調査日程の調整
- 調査地点の選定
- 方言インフォーマントの確保
- メンバーの役割分担
- 調査パンフレットの作成

これらの事柄に関する打ち合わせを、調査メンバー間で数度にわたっておこなうことになる。検討の結果、同意要求表現など5項目を調査項目として立てること、調査を2012年9月1日から3日にかけておこなうこと、屋久島内で人口が比較的多い地域である宮之浦、安房、尾之間の3地点（図1中の丸囲み地点）を調査拠点とすることなどが決まった。



【図1：屋久島略図および調査地点⁶⁾】

⁶⁾ この地図は、web上の増山重雄氏作成「あるつく屋久島」内の地図に修正を加えたものである。
地図URL：<http://www10.ocn.ne.jp/~alook/coose.htm>

インフォーマントについては、屋久島居住経験のあるゼミ生の知人の方に依頼し、宮之浦、安房両地域在住のインフォーマントを集めてもらった。また、別の屋久島出身の本学学生にも依頼し尾之間地域在住のインフォーマントを紹介してもらった。

そのうち調査参加学生間で各々の役割を決めることになる。調査リーダー、交通・宿泊予約係、会計係、パンフレット作成係などの担当者を割り当てる。そして、決定事項を詳細に記したパンフレット(図2.1, 2.2)が完成した時点で、調査前におこなっておくべきことはほぼ終了となる。

ここまでに至る段階で調査の全体的なイメージをメンバーが共有しておく必要があり、既にこの時点でフィールドワークは始まっていることになる。

日本語学ゼミ・2012-秋の方言調査のしおり

鹿児島国際大学日本語学ゼミ(担当教員 松尾弘徳)

日時: 2012年9月1日(土)~9月3日(月)
場所: 鹿児島県鹿児島郡屋久島(宮之浦、安房)

1. 方言調査参加者一覧..... 2
2. 調査スケジュール..... 3
3. グループ分け(暫定版)..... 4
4. 携行品リスト..... 5
5. 調査マニュアル..... 5
6. インフォーマントリスト(未定)..... 6



調査スケジュール (集合場所)



■JR「鹿児島中央駅」からのアクセス

1. タクシーで約15分
2. 電車で鹿児島駅前行きへ乗り、「車返り口」で降りた後、初島の見える方向へ徒歩約15分

- ・JR 阪之上駅 7:05 発 ⇒ JR 鹿児島中央駅 7:28 着
- ・JR 阪之上駅 7:24 発 ⇒ JR 鹿児島中央駅 7:46 着

※JR 組は、中央駅からタクシーで乗り合って港に向かうようにするとよい

9月1日(土) 一日目

8:00 フェリー乗り場(鹿児島港南埠頭)集合(遅刻厳禁!)

8:30 出発

船内にてミーティング

- ・ 自己紹介
- ・ 携行品の確認(デジカメ・パソコン・謝礼品・ICレコーダー)
- ・ 会場致意;お茶、紙コップの準備
- ・ 調査票・各項目の最終確認

12:30 屋久島着

14:00 ~ 16:30 宮之浦(橋川公民館)にて方言調査

一夜「民宿いわかわ」にて
データ作成・分析(2時間程度)
グループに分かれて、交代制で、データ化と夕食を済ませます。

【図2.1.: 調査パンフレット(抜粋)】

頒布品リスト

【全人で準備するもの】

- デジタルカメラ（記念写真用、調査風景撮影用）×3 （⇒抽出学生を決める）
- パソコン ×3 （⇒不足分は大学から借り出す）
- ICレコーダー×6、プロジェクター ×1
- 調査票（文法、音韻（基礎音素）、アクセント、その他）×50
- 村裏品（延喜コード、電灯）
- お礼の品物（大学グッズ）×30、お茶、紙コップ

【個人で準備するもの】

- 学生証（フェリーでの予約のため必ず持参）
- USBメモリ（持っていない学生は必ず購入、1GB以上のものがよい）
- 筆記用具、方言調査グッズ（バインダー、磁石持ち運び用バッグ等）
- 運転免許証（免許所持者のみ）
- 保険証（またはそのコピー）
- 現金・現金・タオル
- お金（朝食・食事代など3万円、帰途後1万円程度返還）

調査マニュアル

- 挨拶と自己紹介をし、録音の許可をいただく。
 eg.「こんにちは、鹿児島国際大学国際文化学部〇年の～です。今日はよろしくお願ひします。」
 「念のために録音をとらせていただいているのですが、よろしいでしょうか？」
- 名前・年齢・出身地などを聞き、調査票の1枚目（フェイスシート）に記録する。
 ※ 出身地以外に居住履歴があるかどうか尋ねる。
- 録音開始
 ICレコーダーのスイッチを押し、「〇〇市～さんです、よろしくおねがひします。」と数回に入音、調査を始める（あとで録音の音声がわかるようにするため）。
- 調査開始 調査票は必ず黒のボールペンで行う。
 ● 筆尖が損傷した場合はすべて記録し、最も使用頻度の多いものを尋ね、それに○をつける。
 ● 記入漏れがないかを最後にチェックする。
- お礼を述べ、贈り品を渡す。
 eg.「本日は貴重なお話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございました。」

個人情報なので、調査票や音声データなどの取り扱いは十分注意！

インフォーマントリスト

【9/1（土）宮之城】：校 横川公民館

番号	出身地	調査時間	年齢	氏名	聞き取り回数	録音回数	写真・礼状 回収
Yak-m1	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m2	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m3	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m4	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m5	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m6	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m7	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m8	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m9	-	-	-	-	-	-	-
Yak-m10	-	-	-	-	-	-	-

【9/2（日）安房】：校 安房公民館

番号	出身地	調査時間	年齢	氏名	聞き取り回数	録音回数	写真・礼状 回収
Yak-n1	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n2	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n3	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n4	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n5	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n6	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n7	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n8	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n9	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n10	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n11	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n12	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n13	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n14	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n15	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n16	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n17	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n18	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n19	-	-	-	-	-	-	-
Yak-n20	-	-	-	-	-	-	-

【図2.2.：調査パンフレット（抜粋）】

2.2. 方言調査当日

今回の方言調査は、参加メンバーが2人1組になってインフォーマントに聞き取りをおこなう形式でおこなった（図3）。調査は対面聞き取り方式なので、調査にリラックスして臨んでもらうためにまず世間話をしながらコミュニケーションをとることから始める。そのようなことも含めると、インフォーマント1人あたりの調査時間は長いときには1時間半にも及ぶことになる。かように、方言調査は質問される側（インフォーマント）のみならず、調査する側にとっても大変な作業なのである。

インフォーマントは必ずしもこちらの思い通りに答えてくれるわけではないため、こちらが聞き出したい項目をうまく引き出せるよう調査者はその場に応じた工夫をする必要が生じる。ここでのインフォーマントとのやり取りを通して、学生のコミュニケーション能力の向上が期待できるのである。



【図3：実際の方言調査の様子】

2.3. データ化作業と分析

インフォーマントへの聞き取り調査が終わっても、そこでフィールドワークが終わるわけではない。調査1日目、2日目の夜には、それぞれの日の調査で得られたデータをExcel（表計算ソフト）にまとめるデータ化作業をおこなった。こうしておく、データの並べ替えなどが容易になり、分析の際に役立つ。方言調査はただ聞き取りをおこなうだけでは意味がなく、得られたデータを分析できるようなかたちにする必要がある。図4は調査結果をデータ化したものの一部であるが、このようなデータシートをすべての調査項目、すべてのインフォーマントについて作成するのである。

番号	地域	年齢	(9)話し手情報量	(10)同じ情報量
Yak-m1	屋久島町楠川	15	ソウダヨネー	ソウダヨネー
Yak-m2	鹿屋市	23	◎ダカラヨー ダカラヨネー	ダヨー
Yak-m3	屋久島町宮之浦	32	ヨーヨー ヨー ダカラヨー ×ダヨー ×ジャッド	ソノウチ クツチャガ ×ヨーヨー ×ヨー ×ダカラヨー
Yak-m4	屋久島町楠川	43	ジャロネー ジャーカラヨー アタリマエヨー	ヨーヨー
Yak-m5	屋久島町楠川	18	◎ソウダネー ダカラヨー	ダカラヨー
Yak-m6	屋久島町楠川	62	◎ジャロガヨー ジャッデヨー ジャットヨー	◎ソノウチクツチャガー ジャットヨー
Yak-m7	屋久島町楠川	70	オイシカヨー オイシカトヨ	ジャートカイ ジャーカラヨー ジャッドカイ ソナンダー ダカラヨー
Yak-m8	屋久島町楠川	84	ワーガノユーゴテ オイモ ソー オモチョンガヨ	オイモ ソゲン オモチョンガヨ
Yak-t1	西表市安納	56	◎ジャロガヨー ジャーカラヨー	◎ジャヨネー ジャヨナー
Yak-a1	屋久島町安房	52	ジャードネー	ジャードネ
Yak-a2	屋久島町安房	13	ダヨネ	クルヨネ
Yak-a3	屋久島町安房	25	◎ソウダヨネー ダヨー	ソウダヨネ
Yak-a4	屋久島町安房	44	◎ジャロガヨー ヨーヨー	クルンジャナイ
Yak-a5	屋久島町安房	72	ジャードー	ホガイロカイ「大丈夫だろうかい」
Yak-a6	屋久島町安房	84	ダヨネー ソウネー ヨーヨー ヨー	ソウネー ダヨネー
Yak-a7	屋久島町安房	60	○ジャドネー(優しい言い方) ○ジャドー(親しい人へ使う)	ジャドネー (モウイッキクトヨー)
Yak-a8	屋久島町尾之間	53	◎ジャッドー ジャロー	ジャッカモネー
Yak-a9	屋久島町宮之浦	51	◎ジャンネー ジャイヨネー	◎ダヨネー ジャイヨネー
Yak-a10	屋久島町安房	76	ジャード ヨカッタネ ウマカロガヨ	ジャード コトヤガ

【図4：「2. あいづち表現」Excel データ (抜粋)】

データ化ができれば、いよいよ日本語学的分析作業に取り組むことになる。屋久島方言を考察する場合にどのような視点からおこなうのがもっとも有効なのかを明らかにするために、世代差、地域差、あるいは鹿児島県本土の調査結果との比較など、さまざまな切り口からデータを分析してゆく。

このような丹念な作業があってこそ、1.2. で述べたような分析結果が得られるのである。

2.4. 調査後のこと

屋久島から戻ってきても方言調査は終わらない。まずおこなうべきことは、礼状の執筆である。協力してくださったインフォーマントの方々にお礼状を書き記念写真を同封して送ることで、調査協力への感謝の気持ちを伝えるのである。

学生の中には手紙をまともに書いたことのない者も多い。しかしながら、社会に出て働くようになると、人間関係に広がりが出ることで否が応でも手紙を書かねばならない場面に直面する。それを見越して、学生を引率して方言調査に出かけた際には、稿者の見本（図5）を示したうえでかならず学生直筆の礼状を書かせるようにしている。

時にはインフォーマントの方が手紙の返事を下さることもあり、そのようなやりとりを通じて学生たちは人間関係の大切さを学ぶのである。

また、今回のFAP調査では、成果報告会（2013年1月12日実施）での発表が義務付けられていたこともあり、データ化した調査内容に考察を加え、それをもとにしてプレゼンテーションをおこない、最後に総まとめとなる成果報告書を作成して提出した⁷。発表会では揃いのゼミTシャツを作成しそれを着用してプレゼンテーションをおこなったり、ゼミのCM動画を作成して流すなどの工夫を凝らすことで、ゼミの雰囲気うまく伝えられたのではないかと感じている。

⁷ 成果報告会の準備の様子や報告会当日の様子については、下記URLにて閲覧可能（2014年1月時点）。
<http://www.iuk.ac.jp/k-syugyo/actionprogram/fap20130112.html>

鹿儿岛国際大学日本語学ゼミ・方言調査にご協力下さった皆様
拝啓 秋冷の候 ますますご清涼のこととお慶び申し上げます。
さて、このたびは私どもの屋久島方言調査にご協力いただき、誠に
ありがとうございました。皆さま大変親切にして下さり、懇縮に存じます。
皆さまより放っていただいたその土地のことは、まさとんと記録し、皆さまが
その土地に生きていらしゃったのだという証を書きとめておくこと、いかん
にはできませんが、その点において少しでもお役に立てましたら幸いです。
存じます。
あるいはまた調査のお願いをさせていただくまでもしれません。その折は
何とぞよろしくお願い申し上げます。
最後になりましたが、実際にお話をうかがった学生からのひとことを
文面に添えておまじり。あわせて調査の折の写真も同封します
ので、実覧くださればと存じます。

【図5：礼状見本（稿者作成）】

3. 「現実の検証」の場としてのフィールドワーク

フィールドワークの大きな意義は、座学で得た知識やものの見方を実践してみることで学びを「体感」できることにある。入念な下準備があるからこそ調査は意味を持つのであり、やみくもにその地の方言を尋ねて回るだけでは何も得られないことは、これまで述べ来た通りである。

フィールドワークは実学重視の昨今の大学教育の風潮の代表と言えるが、それでは大学教育においてフィールドワークはどのようなものであるべきなのだろうか。

文筆家として知られ、またフランス現代思想を専門とし大学でもかつて教鞭をとっていた内田樹氏は、このような実学志向について次のように述べている。

江戸時代の私塾とか藩校とか寺子屋における「実学」と、私たちがいま「実学」と呼んでいるものは、言葉は同じだけれども、意味内容がかなり違うと思う。かつて「実学」という言葉にこめられたのは、学んだことの有効性は現実の生活の中で検証されなければならないということであった。現実の検証に耐えることができない学問は虚ろであるという考え方に私だって異議はさしはさまない。けれども、いまの人たちが「実学」と言うときの「現実の検証」はすべて「金になるかどうか」である。「それを勉強すると、お金になるの？」という問いが「実学」か否かを決定するほとんど唯一の基準になってしまっている。その学問を修めたことによって結婚生活がうまくいったとか、友達が増えたとか、よく寝られるようになったとか、何でも美味しく食べられるようになった……というようなことは、もう実践の効果にはカウントされない。そうではなくて、大学で得た資格や技能で、どれだけ早く確実に教育投資が回収できるかどうか、それだけが「実学」と「非実学」を分岐している。

(中略)

私が教えている文学や哲学や武道の場合、学生に「どうやって教育投資を回収できるんですか？」って訊かれても返答に窮する。人間として幸福で深みのある人生を生きるための基礎的な知識と技術だと言ってみても、そのような能力は総合的すぎて数量的に測定できないから教育投資の回収率計算にはなじまない。しかし、そのようにして数値化できない人間的能力をアウトプットする学問領域を片っ端から「効果ゼロ」と査定して大学教育から放逐した場合、あとに何が残るのであろう。(内田(2012):270-272)

稿者も、行きすぎた実学重視志向には懐疑的な立場の人間である。講義や研究書から学んだ方言に関する知識や方言調査の技法を生かし、それに基づいて各地へ出向いて実地の方言調査をおこなえば、いろいろなことが見えてくるはずである。この実地調査の部分が内田氏の言う「現実の検証」に該当するものと思われるが、当然ながら方言調査それ自体は「金」にはならない。しかしながら、2節で述べたごとく、方言調査の下準備に始まり礼状送付を済ませるまでの一連の流れの中には、「数値化できない人間的能力」を向上させるためのさまざまな仕掛けが含まれているのである。

以下に、調査に参加した学生がFAP成果報告会発表時に述べた「方言調査で学んだこと」を抜粋する。方言調査というフィールドワークが、数値化できない人間的能力の向上に大いに貢献できることを感じていただければと思う。

◆就業力

- ・ 集団行動において、状況に応じて自分のすべきことを考え、何を一番にするべきかを考えるということを学んだ。

- ・相手のことを理解しようとすることの大切さを学び、考えた上でのコミュニケーションをとっていくことを学んだ。

◆成長

- ・鹿児島本土で聞く方言以外の方言を聞き、それを本土で使われている方言と比較してみると違った点・同じ点があるということ学んだ。
- ・作業を通じて、協力し合うこと大切さを学んだ。
- ・対人関係において、人と人との繋がりだけではなく優しさや温かさに触れ、その大切さを学び、感じられるようになった。

(以上、FAP参加学生作成のパワーポイント資料より抜粋)

4. まとめ

FAPの申し込みをおこなうにあたり、稿者は次のような文章を記して方言調査の意義を説いた。方言調査というフィールドワークが持つ学問的意義および教育的効果に対する稿者の考えはこの文章に集約したつもりである。

1. 期待される成果

古くから鹿児島で使われてきた伝統的な方言は書物で調べることはできるが、現在の鹿児島方言を知ることはなかなか難しい。それに対して、本活動はインフォーマント（被験者）と直接対面で話しその土地の方言を記録してゆくという方法をとる。それによって、うつりゆく鹿児島方言の推移のさまを知り、現時点における鹿児島方言を記録することができる。

また、鹿児島方言の中には特定の地域でしか使用されないものがある。たとえば、言葉の語尾にダセンを用いる地域は薩摩川内市・いちき串木野市の一部に限られる。鹿児島の各地域を調査することでそのような偏りを持つ方言形の分布図も作成できる。

上記の学術的成果とあわせて、方言調査は本学学生が実際に地域の方々と対面するため、そのような交流を通じて「学生たちが今どのような学びをしているのか」を見ていただけ。これにより、大学と地域との連携も生じるであろう。

2. 教育効果（学生にどのような力が身につくか、身につけたいか）

調査の事前準備の教育効果として次のようなものが挙げられる。

- ①学生間で会合を重ねることによる、グループ（ゼミ）の結束力の強化
- ②調査項目・調査地域・インフォーマントの選定、および調査に向けてのパンフレット作成、調査

- ③会場の確保など、一連の下準備を通じての人的成長
また、調査後の教育効果として次のようなものが挙げられる。
 - ④幅広い世代との交流によるコミュニケーション能力の向上
 - ⑤調査結果の統計・手順を身に付けることによるデータ処理能力の向上
 - ⑥インフォーマントの方にお礼状を書くことによる礼儀作法の習得
- 以上のような教育効果が期待できる。

(以上、FAP 申請書類記載の文章)

本稿は、上記の内容についていささか具体的に述べたものである。「方言調査」という言語研究の一領域の実際がどのようなものなのか、そして学生を方言調査に参画させることがどのような教育的効果を持つのか、さらには大学におけるフィールドワークがどのようなものであるべきなのかといったことについて、考察を加えてみた。

座学で得た知識を実践、あるいは検証することのできる場であるという点で、フィールドワークは大学での学びをいっそう推進させる可能性を秘めたものであると言えよう。学問分野を問わず、工夫次第でいろいろなフィールドワークが可能となる。「実学志向」が誤った方向へ向かわないようにしっかりと手綱をとるのも、大学教員の責務の一つなのではなかろうか。

【謝辞】

FAP による方言調査にあたっては、鹿児島国際大学就業力プロジェクト室職員の方々的一方ならぬご助力を賜った。とりわけ、就業力育成プロジェクト調査研究員（当時）の川宿田好見氏には諸事万端にわたり相談に乗っていただいた。また、方言調査にご協力下さった屋久島方言インフォーマントの方々のご協力なくして本稿は成しえなかった。

上記の方々に対し、ここに記して深く御礼申し上げます。

【付記】

本稿は平成25年度科学研究費補助金（若手研究 B，課題番号23720235「日本語史の知見を生かした九州新方言の文法研究」）による研究成果の一部である。

参考文献

- 内田樹（2010）『街場の大学論』角川書店
- 鹿児島国際大学就業力プロジェクト室編（2013）『「地域力を生む自立的職業人材育成プロジェクト」鹿児島国際大学年次報告書』鹿児島国際大学就業力プロジェクト室
- 小林隆・篠崎晃一編（2003）『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
- 小林隆・篠崎晃一編（2007）『ガイドブック方言調査』ひつじ書房